

# 新聞を活用した情報活用能力育成の取り組み -高校生のホームルーム活動を通して-

森美穂<sup>1</sup> 多川孝央<sup>2</sup>

**概要：**情報活用能力の育成を、情報科の限られた授業のみで担うのは困難である。身近な情報メディアである新聞を活用し、ホームルームにおける継続的な取り組みとして、次の二つの活動を実施した。一つ目は、記事の一つ選んだ上で自分の考えを「1行以上」書く活動を当番制で担当すること、二つ目は、1年の最後に「新聞コラム」風の文章を執筆することである。1年間を通じたこれらの取り組み後にアンケートを実施し、生徒の意識の変化を観察した。

**キーワード：**情報活用能力、情報リテラシー、新聞、高校生、ホームルーム、コラム、情報科、情報 I

## 1. はじめに

筆者が勤務する高校では、2003年度に共通教科情報科が開始されて以来、その教育課程における該当科目（情報B・情報の科学・情報I＝すべて2単位科目）について、1、2年次それぞれに1単位ずつを配当するカリキュラム編成を行っている。これは、情報科の授業を1年間のみの学習で完結させるのではなく、週あたりの授業時数を減らしてでも、2年間にわたって学び続けることが重要だと位置付けているためである。しかし、情報科の限られた単位数の授業だけでは、「情報活用能力」の育成に十分とは言い難い。筆者はこれまでに、「総合的な探究の時間」の取り組みの一つである「課題研究」を、情報科の「プロジェクト・マネジメント」学習と結びつけ、教科横断型授業で実施[1]するなど、情報科の授業以外との連携について工夫してきた。そして、さらに長期的かつ継続的な取り組みができないか、模索してきた。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）[2]総則では、第3款 教育課程の実施と学習評価 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の(3)に、以下のような言及があり、新聞の活用を推奨している。

(3) 第2款の2の(1)に示す情報活用能力の育成を図るため、各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ること。また、各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。

新聞は、政治、経済、社会、スポーツ、エンターテインメントなど多様なジャンルの情報を網羅的に扱っており、高校生のように専門性のない人にもある程度分かりやすく、最新のニュースや出来事を伝えるメディアである。新聞社の記者や編集者が情報を収集し、一定の校正を経た上で毎

日刊行されており、前述したような各種ジャンルにおける専門的な解説やコラムなど、様々な記事が掲載されている。一方で、政治思想などについては、新聞社による方向性の違いなどが存在することも、念頭に置く必要がある。そのような特徴を踏まえた上で新聞を教材として活用することは、「情報活用能力」育成に役立つと考えられる。

情報活用能力などの育成のために新聞を活用する取り組みには、先行する事例が多数存在する。例えば、後藤と丸山（2009）[3]は、小学生に向けた、メディアに対する批判的思考育成のための教材パッケージの開発を行っており、その教材として新聞を用いている。教材を使用した効果として「メディアからの情報が偏る理由と、偏った結果、隠されているかも知れない情報を指摘できるようになったことが示唆された」とまとめている。また、高橋と和田（2017）[4]は、高校の情報科におけるメディア・リテラシー教育の一環として、18歳選挙権に関する新聞の分析と制作を行い、学期末に生徒が作成した振り返りシートについての質的分析を行っている。これにより、メディアの特性を理解する能力や批判的に捉える能力などが培われた可能性を指摘している。他にも、学校における新聞を活用した教育活動として、NIE（Newspaper in Education）がある。これは1930年代にアメリカで始まり、日本では1985年に提唱されたものである。いま子どもたちに求められる力として「膨大な情報が行き交うインターネット社会で、正しい情報を取捨選択し、読み解く情報活用力」などを挙げており、NIEのWEBサイト（<https://nie.jp>）では多くの学校や教科での実践事例が紹介されている。

このように、新聞を教育活動で用いることの効果は、これまでに実践事例として示されているが、その多くが、教科の「授業」の時間を用いて実施したものである。今回の取り組みでは、教科の授業の枠外である「ホームルーム」活動の時間を用いて継続的に実施することで、生徒の「情報活用能力」育成に向けた働きかけを行なった。1年間をかけて実践したので報告したい。

<sup>1</sup> 福岡県立修猷館高等学校

<sup>2</sup> 筑紫女学園大学

## 2. 目標・計画

「情報活用能力」育成のために新聞を活用すること、また、継続的な働きかけを実現するために、教科の授業外であるホームルーム活動の時間を充てることが、この取り組みのポイントである。そのために、五つの下位目標を設定した。

### 新聞を活用した「情報活用能力」 育成のための下位目標

- ① 生徒が新聞紙面を「読む機会」を得ること。
- ② 生徒が興味関心のあることだけでなく、さまざまな分野の「情報に出会う機会」を得ること。
- ③ 生徒が記事を主体的に選び、それについての自分の考えを短い文章にまとめる経験を通して、そのテーマについて「より深く考える」こと。
- ④ 生徒が、他者に読まれることを前提とした文章を書く経験を通して、「自分の考えを的確に表現する」トレーニングの機会とすること。
- ⑤ 他の生徒が書いた文章を読むことで、「他者の興味関心や思考に触れる」こと。

これらを実現するために、具体的に二つの取り組みを計画し、実施した。一つ目は、当日の新聞からその日の担当者が記事の一つ選んだ上で自分の考えを「1行以上」書く「日々の新聞当番」、二つ目は、クラスの全員が1年の最後に『新聞コラム』風文章の執筆を行うというものである。「新聞当番」では下位目標①から⑤の実現を、また、『新聞コラム』風文章の執筆では③から⑤の実現をねらった。

## 3. 取り組みの実際

### 3.1 日々の新聞当番

#### (1) 実践内容

一つ目の取り組みである、日々の「新聞当番」の対象は次の通りである。

- 福岡県立修猷館高等学校 2022年度1年8組 (40人)
- 2022年4月11日～2023年3月20日  
(長期休業期間は休止)

クラス担任(筆者)は、毎朝のショートホームルーム時にその日の新聞(朝刊)を持参し、誰でも自由に読めるよう、教室前方に置く。新聞当番は、いわゆる日直当番のように出席番号順に毎日一人が担当する。新聞当番の生徒は、その日の新聞から気になった記事の一つを選び、ハサミで切り取る。そして、三色ボールペンをを用いた文章読解法[5]を用いて、記事を読みながら重要部分等に傍線を引く。具体的には、最も重要と思った箇所には赤線を、その次に重要と思った箇所には青線を、個人的に気になった箇所には緑

線を引く(緑線は赤青線との重ね引きも可)というもので、赤線と青線を組み合わせることで、概ねその文章全体の要約になるよう、要点を把握する手法である。なお、この三色ボールペンの活用については、1年次最初の情報Iの授業で、文章情報における要点把握の手法として紹介をしている。

そのように生徒がスクラップした記事を、筆者が予め準備したA4サイズのルーズリーフに貼付し、記事に関する自分の考えを「1行以上」書く。新聞当番はそれを指定のファイルに収め、当日のうちに担任教員へ提出をする。担任教員は、その記事と生徒の書いた文章を読み、コメントをして、翌朝のショートホームルームの際に、書いた生徒へ渡す。ファイルを渡された生徒はコメントを確認し、次の生徒にファイルごと渡す、というルーティンである。当番の生徒は、過去に選ばれた記事や書かれた文章、担任からのコメントを、ファイリング済みのページから読むことができる。この取り組みを、1年間継続したところ、夏休み等の長期休業期間を除いた実質日数は180日分となった。40人のクラスであるため、1年間で一人当たり4～5回、約2ヶ月に1回程度担当したことになる。

### (2) 分析

#### ■ 生徒はどのような記事を選んだか ～記事の見出し～

1年間の取り組みを通じて、生徒が選定した180日分の記事の見出しと小見出しをデータ化し、テキストマイニングを行った。(なお、本論文中のテキストマイニングは、すべてユーザーローカルテキストマイニングツール <https://textmining.userlocal.jp/> を使用した分析である)

登場した単語は合計1,521語であり、そのうち名詞が1,394語を占める。新聞の見出しという特性上、端的且つ文字数を抑えた簡略化した表現になるため、名詞が多く並んでいる。どのようなテーマの記事を選定したのかを分かりやすくするため、名詞に絞り、出現回数の多い順に表にまとめた。紙幅の都合で、上位2.5%にあたる出現回数4回までの単語を示す。

「ウクライナ」が最も多く、15回出現している。ロシアがウクライナに侵攻したのが2022年2月であり、同年4月に高校に入学した生徒たちにとって、関心が強いことを示している。また、「日本」「九州」「福岡」「福岡市」という身近な地域名が上位にあり、自分に近い話題を選定していることがわかる。「参院選」が6回と上位にあったのは印象的である。18歳から選挙権を有することから、主権者教育が高校で実施されていることも背景にあり、国政選挙への意識の高さも感じられた。他にも「コロナ禍」「マスク」「コロナ」「着用」なども頻出しており、コロナ禍が始まって3年目となったこの時期における生徒たちの興味関心の向きを示している。

選定された記事の見出し	
出現回数	単語（名詞）
15	ウクライナ
10	米
8	日本
7	九州, 対策, 福岡
6	福岡市, 参院選, あす, きょう, 死亡, 観光, 中国, 初, マスク
5	コロナ禍, 円安, ロシア, 船, 氏
4	SNS, 侵攻, 死者, コロナ, 着用, 首相, 北朝鮮, 政府, 対, 強化, 判断, 影響, 姿, 病院, 声

表 1 「選定された記事」の見出しにおける頻出語上位

### ■ どのような記事が印象的だったか ～生徒の感想～

新聞を用いた一連の取り組みについて、年度末の3月中旬にアンケートを実施し、生徒の反応や考えについて、確認した。アンケートは以下の日時、環境にて実施した。

- 2023年3月13日（月）
- パソコン教室にて実施
- Google フォームを使用
- 当日欠席者を除いた38人から回答

このアンケートで、以下の質問を行った。

今年読んだ記事で、①最も印象的だった記事があれば教えてください（うろ覚えで構いません）。また、②なぜ印象に残ったのか、その記事を読んであなたが感じたこと、考えたことを教えてください。

この回答記述について、①と②の文章をすべて含んだ状態で、先ほどと同様の方法でテキストマイニングを行った。なお、今回のアンケート記述で頻出する次の11語の単語（「新聞」「読む」「記事」「取り組み」「当番」「新聞記事」「新聞当番」「コラム」「書く」「読む」「思う」）については、分析から除外している。

回答記述全体で登場した単語は合計465語、そのうち名詞は336語であった。前述した記事の見出しとの比較を行うため、こちらも名詞に絞り、出現回数の上位2.4%にあたる出現回数5回までの単語を表2に示す。

生徒たちの回答記述からも「ウクライナ」「戦争」「侵攻」などの単語が多く見られ、選定された記事の見出し上位とも符合する。最も出現回数の多い「事件」や「報道」「ニュース」は、語の意味として具体性に乏しく記事の見出しには登場しにくい単語ともいえるため、生徒によるふりかえ

りとしての回答記述の方に、より多く出現していると推察される。

印象的だった記事	
出現回数	単語（名詞）
17	事件
10	ウクライナ
10	日本
9	戦争
6	侵攻
6	報道
6	ニュース
5	衝撃

表 2 「印象的だった記事」の回答における頻出語上位

この質問におけるアンケートでの回答を、抜粋して紹介する（文章は原文の通り）。

回答者 A :

- ①ウクライナ侵攻
- ②テレビやインターネットの映像のように音声があったりするわけではないが、活字による報道が淡々とウクライナの被害状況を物語っていて、強い恐怖が植え付けられたため。

回答者 B :

- ①元首相の死亡事件について
- ②日本でこのようなことが起こるのか、という衝撃を感じるとともに、その記事では書いた人の意見としてこのような事件を堂々と報道することへの懸念が書かれていた。その見方は今までしてこなかったので、改めて報道に対して考え直すきっかけになった。

回答者 C :

- ①子供がバスの中に猛暑の中、長時間取り残されていた事件に関する記事です。
- ②そのニュースを見てとても悲しい気持ちになりました。すごく暑い中、何時間も一人でバスの中にいたことを考えると、本当にどれだけつらかったらと思うととても胸が締め付けられる思いになりました。私でも絶対に耐えられる自信がないのに、わずか4歳の子供が、水筒の中を空っぽにして、衣服を脱いで、必死に生きようとしていた事実を知り、さらに胸が張り裂かれる思いで溢れました。きちんとした管理を怠っていたこと、命を預かっているという自覚と責任の薄さに本当に怒りを覚えました。命の重さについて、改めて深く考えるきっかけになりました。



## ② 生徒が興味関心のあることだけでなく、さまざまな分野の「情報に出会う機会」を得ること。

- 新聞のすべての記事に目を通すため、より広い範囲の情報を知ることができた。
- 今までは自分の興味のある分野の最新情報などしか調べることがなかったので、新聞を読むことで受け取る情報の種類の幅が広がり、ほかの分野にも興味が湧いたこと。
- 新聞を読み、関心がないニュースも知ることができ、それが意外と面白い時もあるという体験ができた。

## ③ 生徒が記事を主体的に選び、それについての自分の考えを短い文章にまとめる経験を通して、そのテーマについて「より深く考える」こと。

- 一つの事柄に対して、深く自分の意見を持つまで考えてみるということへの練習にもなった。意見と事実の区別が以前よりもついたと思う。
- ニュースを見て、自分が考えたことを言語化するのに時間を要したが、言語化しようとすることでいるんな見方ができた気がした。
- 社会で起こっていることに関心を持ち、テレビなどで偶然見たニュースについても、しっかり考えて自分の意見を持つようようになった。

## ④ 生徒が、他者に読まれることを前提とした文章を書く経験を通して、「自分の考えを的確に表現する」トレーニングの機会とすること。

- 文章の書き方や簡潔かつ読みやすいまとめ方を日常的に意識するようになった。
- 要点を押さえることが必要になったので、インターネットではなく自分自身で記事を要約して理解する力が少しついた。

## ⑤ 他の生徒が書いた文章を読むことで、「他者の興味関心や思考に触れる」こと。

- 世の中のいろいろな考え方を知ることができた。
- その日の新聞記事についての自分の考えだけでなく、クラスメイトが取り上げた記事も見ることで、考え方の違いを知ることができた。

また、紹介した回答以外にも、当初のねらいに近い回答がそれぞれ複数得られたので、取り組みの効果として前向きに捉えている。その他にも、以下のような回答があり、これらは副次的な効果と捉えている。

- 三色メソッドを活用することで流して読まず、自分にどんな部分が刺さるのか考えながら読めた。
- 新聞にどのような構成で記事が載っているのか知れた。

- 以前より情報の質を気にするようになった点。
- もともと進路の一つとして報道関係を考えていたため、より興味が湧いた。直接的にも、間接的にも自分の将来について考える良い機会になったと思う。

## (3) 新聞当番の取り組みにおける課題

新聞には、一面記事で取り上げられるような大きな報道から、紙面をあまり割かれなような小さなテーマまでさまざまなものがある。多くの記事の中から、生徒がなぜその記事を選んだのかを教員が理解するためには、予め、教員がその日の記事全体に目を通しておくことが望ましい。しかし、残念ながらほとんどの場合において、そこまでの時間を割くことができなかった。当番の生徒からファイルを渡されるまでに、少なくとも、見出しのみでも把握しておくことは、教員側の今後の課題と考えている。

また、時事的な話題には、センシティブなものや賛否両論あるもの、教員生徒双方の知識が乏しいものもある。文章記述での意見交換は、ときに倫理的な問題を孕む場合もある。コメントをする際、生徒がその記事やテーマについてどのように考えたのかを尊重し、まずは肯定的に受け止めることが肝要である。その上で、別の視点や情報を提示できる場合には、生徒自身が次に考える際の材料となるような提示を、押し付けることなく行うことに留意し、文章表現にもできる限り気を遣う必要がある。そして、当然のことではあるが、教員として人権に関する意識を常に高く持つ必要がある。それでも、コメントを書いた後に、この表現は適切であったか、もっと丁寧な表現で書くべきではなかったかと感じたことが度々あった。これについては、コメントに悩む場合には、当日中に書くのではなく、熟考して翌朝書くなどの選択をすることで、対処することとした。

## 3.2 「新聞コラム」風文章の執筆

### (1) 実践内容

二つ目の取り組みは、1年間の最後の活動として、2月から3月のホームルームの時間を使って「新聞コラム」風文章を執筆する、というものである。どの新聞にも、朝刊一面下部には一定の文字数で書かれた「新聞コラム」が掲載されている。筆者が毎日持参していた西日本新聞には、「春秋」というコラムが毎日569字ちょうどで掲載されている。多くの場合、時事的な話題からはじまり、執筆者の何らかの考えを伝える文章展開となっており、短い文章であっても興味を惹かれるものが多い。なお、これは当初から予定していた取り組みではない。2月中旬に新聞当番が回ってきたある生徒が、その日の記事として「新聞コラム」を選定しており、「一度でいいからこのコーナーを書いてみたい」と感想に加えていた。これをきっかけとして、クラス全体の取り組みとして進めた次第である。



どれも伝えようとしていることがあって面白かった。

- 自分が知らなかった問題や、身近にあるのに気が付かなかった事について書いてとても面白かった。時々でも自分の考えを誰かに発信する機会が必要だと思った。
- 考えの違う人の書いた文章を読むことで、また新しく自分の考えを深められるところもあって、有意義な体験だった。
- 文章の構成や言葉遣いで、読書量がなんとなく読み取れた。
- 同じ 569 字で書き手によってこんなにも各々の世界が広がるのだなと思うと、改めて文章の力のすごさを実感した。

クラスメイトによるコラムを読む活動を通じ、1年間共に過ごしてきた仲間の意外な一面を発見したり、自分とは違った考え方を知ることによってさらに考えを深めることにつながったりなど、興味深い反応が見られた。また、「時々でも自分の考えを誰かに発信する機会が必要」と回答にあったが、他者の文章を読むことによって、読まれることを前提に文章を書くことの重要性、面白さにも気が付いたと思われる。1年間の最後に、文章による知的な交流が行えたことは、彼らの友人関係にも何らかの影響を与えたようだ。

#### 4. おわりに

今回の取り組みを通じ、概ね、当初のねらいに即した結果を得ることができた。生徒にとって若干「面倒」な取り組みではあったと思われるが、最終的には前向きに取り組んだ生徒が多かった。特に「新聞コラム風」文章の作成については、それまでの新聞当番の取り組みの延長線上で生まれたものであり、それが生徒側からの発案で実施できた点については、当初のねらいを上回る成果であったと捉えている。

近年、私たち大人も、日々、新聞に目を通すということが少なくなり、インターネットを通じた情報収集が中心となっている。そのような中で、毎日、生徒が選んだ記事だけでもしっかり読む、という機会を作ったことは、筆者自身の情報活用能力の向上にも役立ったと感じている。

筆者は情報科の教員であり、担当する授業科目の単位数が少ないため、多くのクラスの授業を担当することになる一方で、生徒一人ひとりの個性や考えを知る機会は少ない。この取り組みによって、生徒の情報活用能力の育成だけに留まらず、教員が生徒を知る機会となり、また、過去ページをめくったり、コラムを読み合ったりすることで、生徒自身もクラスメイトのことを知る一助にもなったと捉えている。

**謝辞** 1年間の取り組みを継続してくれた福岡県立修猷館高等学校 2022 年度 1 年 8 組のみなさんへ、謹んで感謝の意を表します。

#### 参考文献

- [1] 森美穂・多川孝央 (2022) . 「情報 I」における「プロジェクト・マネジメント」学習-総合的な探求の時間「課題研究」との教科横断型授業の試み- 『情報処理学会研究報告』 Vol.2022-CE-167 No.2
- [2] 文部科学省 (2018) . 高等学校学習指導要領
- [3] 後藤康志・丸山祐輔 (2009) . 「メディアに対する批判的思考を育成する教材パッケージの開発」 『日本教育工学会論文誌』 33 (Suppl.),89-92
- [4] 高橋敦志・和田正人 (2017) . 「高等学校共通教科情報科の授業における新聞の分析と制作を通じたメディア・リテラシー教育の実践研究」 『教育メディア研究』 Vol.24,No.1,13-26
- [5] 齋藤孝 (2002) . 『三色ボールペンで読む日本語』 角川書店。